

石川健太・山口美和子・澤 幸祐・高田夏子・大久保街亜 (2014).
対人依存傾向が視線方向判断に与える効果
心理学研究, 85, 87-92.

石川 健太

対人依存とは他者に対する意識的、非意識的な強い依存欲求をもち、他者からの承認や支持を過度に求めることなどに特徴づけられるパーソナリティ特性である (Bandura & Walters, 1963; Bornstein, 1992)。こうしたパーソナリティ特性の背景には、無力な自己スキーマが関わる (Bornstein, 1992)。無力な自己スキーマとは自己の無力感に関わるスキーマであり、このスキーマが活性化することによって依存に関係した動機づけ、行動、感情反応が生じるだけでなく、依存に関わる情報への感度が高くなることを主張した (Bornstein, 1992; Bornstein, Ng, Gallagher, Kloss, & Regier, 2005)。このモデルを支持する研究として、Bornstein et al. (2005) の実験がある。Bornstein et al. (2005) はhelpless, weak, needy などの依存関連語と、book, table, frame などの非依存関連語を用いたプライミング課題を行った。その結果、高対人依存群は低対人依存群よりも依存関連語への反応が速かった。Bornstein et al. (2005) は、対人依存が高い人の依存関連情報に対する敏感さには無力な自己スキーマが関わり、このスキーマが対人依存の重要な要因となることを主張した。また、高い対人依存傾向をもつ人は、依存関連情報だけでなく、他者の態度に対しても敏感であることを示唆する研究がある (Juni & Semel, 1982; Masling, Johnson, & Saturnsky, 1974; Masling, O'Neill, & Katkin, 1982)。しかしながら、他者の態度や行動のどのような側面に対して敏感になるのかは十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、他者の態度や行動を表す重要な社会的信号である表情と視線 (Adams & Kleck, 2003; Bayliss & Tipper, 2006; Mason, Hood, & Macrae, 2004) に着目した。先行研究では、対人依存が高い人は、他者の態度や行動に対して敏感であることが示唆された (Juni & Semel, 1982; Masling et al., 1974; Masling et al., 1982)。他者が表出する視線や表情などの社会的信号は、依存に関する手がかり、つまり依存関連情報として機能する可能性がある。したがって、本研究では、対人依存傾向の高い人は低い人に比べて他者の視線や表情に対する感度が高く、そのため他者の視線方向に対する情報処理が高まり、視線方向判断が正確になるという仮説を設定した。この仮説を検証するために、本研究では石川・岡村・大久保 (2012) が使用した視線判断課題を用いることで、対人依存傾向が他者の表情認知や視線判断に与える効果の検討を行った。

参加者は大学生46名 (男性20名, 女性26名)、平均年齢は22.85歳、標準偏差は1.66であった。他者への依存性を測定するために、竹澤・小玉 (2004) による対人依存欲求尺度を用いた。対

人依存欲求得点が中央値である73点以上であった24名を対人依存高群、73点未満の22名を対人依存低群とした。課題は石川・岡村・大久保（2012）の視線判断課題を用いた。実験参加者は、提示された顔表情刺激の視線方向が、正面、右、左のいずれかを向いているかを判断した。実験の全試行数は写真のモデル（10人）×表情（怒り、笑い、中立顔）×視線方向（7条件：0°、左右3、6、9°）×2ブロックからなり、合計で420試行であった。実験計画は対人依存（高群、低群）×性別（男性、女性）×表情（怒り顔、笑い顔、中立顔）×視線方向（0°、左右3、6、9°）の参加者間2要因、参加者内2要因の4要因混合計画であった。

実験の結果、笑い顔 ($F(1, 44) = 5.2, p < .001, \eta_p^2 = .1$)、中立顔 ($F(1, 44) = 4.5, p < .01, \eta_p^2 = .09$) において対人依存の主効果があり、対人依存が高い人は低い人よりも他者の視線方向を正確に判断できることが示唆された。この結果はJuni & Semel (1982) やMasling et al. (1974)、Masling et al. (1982) が報告したように、対人依存が高い人は低い人よりも、他者の態度や行動に対して敏感であるという結果と一致する。Bornstein et al. (2005) は、対人依存が高い人は無力な自己スキーマの活性によって、依存に関わる情報への感度が高くなると報告した。対人依存が高い人にとって、他者の視線方向は援助行動を求める対象として適切か否かを判断する上で重要な情報であると考えられる。これらの情報に対して敏感になることによって、より効率的に他者からの援助行動を引き出すことが可能になるかもしれない。これまでの先行研究の多くは質問紙法を用いることで、対人依存が高い人は他者の態度に敏感であることを報告してきた (Juni & Semel, 1982; Masling et al., 1974)。ただし、これらの研究ではコミュニケーションのどのような側面が過敏さに関わるのか十分にはわからない。本研究では、表情と視線について実験を用いることによって、より直接的に対人依存と他者への過敏さの関連を新たに示したものである。本研究の結果は、これまで十分に明らかにされてこなかった、対人依存と視線と表情との関連について言及し、対人依存が高い人の対人認知のメカニズムを明らかにしたものである。こうしたメカニズムを明らかにすることは、対人依存の適応的・不適応的側面がどのように生じるのかを理解する上で重要なものとなるだろう。

引用文献

- Adams, R. B. Jr. & Kleck, R. K. (2003). Perceived gaze direction and the processing of facial displays of emotion. *Psychological Science*, *14*, 644-647.
- Bayliss, A. P. & Tipper, S. P. (2006). Predictive gaze cues and personality judgments: Should eye trust you? *Psychological Science*, *17*, 514-520.
- Bandura, A. & Walters, R. H. (1963). *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Bornstein, R. F. (1992). The dependent personality: Developmental, social, and clinical perspectives. *Psychological Bulletin*, *112*, 3-23.

- Bornstein, R. F., Ng, H. M., Gallagher, H. A., Kloss, D. M., & Regier, N. G. (2005). Contrasting effects of self - schema priming on lexical decisions and interpersonal stroop task performance: evidence for a cognitive/interactionist model of interpersonal dependency. *Journal of Personality*, **73**, 731-761.
- Juni, S. & Semel, S. R. (1982). Person perception as a function of orality and anality. *Journal of Social Psychology*, **118**, 99-103.
- 石川健太・岡村陽子・大久保街亜 (2012). 社会不安傾向者の視線方向判断—表情と解釈バイアス— 心理学研究, **83**, 225-231.
- Masling, J., Johnson, C., & Saturansky, C. (1974). Oral imagery, accuracy of perceiving others, and performance in Peace Corps training. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 414-419.
- Masling, J., O' Neill, R. M., & Katkin, E. S. (1982). Autonomic arousal, interpersonal climate, and orality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 529-534.
- Mason, M. F., Hood, B. M., & Macrae, C. N. (2004). Look into my eyes: Gaze direction and person memory. *Memory*, **12**, 637-643.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討— 教育心理学研究, **52**, 310-319.